

美香ちゃん

発行：青木美香後援会
事務局：南極昭和基地
編集責任：鈴木 裕

美香ちゃんありがとう

石田 恭市

小生が彼女の声を初めて聞いたのは、昭和四〇年（第七次隊）である。

今回と同じように、「ふじ」が暴風圏をこえ氷海に達すると、出港当時の晴海やフリーマントルでの我々に対する声援も、次第に脳裏から薄れて遠ざかって行く。そんな時、日本短波放送による「南極観測向け」の特別放送は、我々と国にいる人達との心をつなぐものとして非常に貴重であった。

「南極観測隊並びに『ふじ』乗組員の皆様お元気ですか？」で始まる青木アナウンサーの声は、今でもはっきりと頭の中で聞くことができる。

越冬が始まり、二月一八日の家族の音が放送された。なつかしい声だ。思わず美香ちゃんに感謝した。職場や家族の声は、この他に三月二二日に本部を通して基地に送られて来た。しかし、この録音は感度が悪いため、さっぱり分からなかった。だから、越冬中の家族の声は、美香ちゃん司会の日本短波のものだけだ。部屋に入って、このテープを何度聞いたか知れない。

今年も、美香ちゃんのお陰で家族の声を二月五日に聞くことができた。NHKよりも本部よりも、小生に

とっては最も頼りになる日本短波放送。そして、その司会をしてくれる美香ちゃん、本当にありがとう。

美香讃美

冬至

浅野 英明

「お元気ですか『ふじ』の皆さん」

「昭和基地でお働きの皆さん」

という甘い声が、もうすぐ聞ける季節となった。早いものである。

あの甘い声を聞くたびに、故国の愛妻、恋人に想いをさせる人もいるだろう。

私は美香の甘い声を聞くたびに、やさしいやさしい女性を想い浮かべ、一人心が満たされる喜びを知り、それに酔っていたが、またその季節が来るのである。

楽しやかな南極

オー 美香

一枚のレコード

吉川暢一

戸外では、夏の太陽がさんさんと照り付け、暑い日差しが窓から斜めに差し込んでいるある昼下がりである。

第十次南極観測隊員の決定もすでに終わり、冷房は効いていないが、一世紀昔の扇風機がカラカラと音をたてて廻っている。国立とは言っても、余りにも貧弱な科学博物館の極地部の一室で、出発の準備に追われて多忙である頃、極地部にも可愛らしい女性が数人いたのであるが、その中でも人目を引く脚の線が太からず細からず、どちらかと言えばやや痩せ型で、腰の線は……の女性が、ある日突然現れたのである。

彼女は極地部に来ると何時も奥の部屋に入り込んで、高らかと非常に澄んだ良く通る特徴のある声で笑っているのをよく耳にした。出発の前で極地部も多忙となり、人手不足でアルバイトにでも雇ったのだろうと思っていた。女性に弱い小生のこととて、真正面から顔を見るのも気がひけ、ましてやこちらから声を掛けるわけにもいかず、せめて後ろ姿を眺めているに過ぎなかったのである。彼女は一見派手に見えたが、また純情なところがあった。

ある極地部のK氏が彼女にネクタイをプレゼントした

ことがあった。彼女は、すぐ家に電話して「どの色にしたら良いかナ。」と伺いをかけていた。てっきり彼氏に相談しに行ったものと思っていたところ、「お母さんに相談したら……。」と言ったのは全く驚いてしまった。このネクタイの贈り主は、やはり彼女の恋人か？

そうこうしているある時、極地部の大先生が彼女を連れて我々の前に現れ、その美人の彼女が我々に用があるというのである。小生びっくりして、一瞬間に血液が逆流するのをどうする事も出来なかった。下を向いて「何でしょうか？」と言だけ言った。すると彼女の美しい声ではなく、大先生の太い男の声で「これを一枚買いなさいよ！」と返って来た。全く押し売りにも逢ったような気がした。

そこに出されたのは一枚のレコードでした。大先生の説明によると、彼女がデビュー曲を吹き込んだというのである。女性に弱い小生のこととて、どんな歌が入っているのか曲目を聞かないうちに、即座に承知してしまったのである。しかし、定価は絶対にまけないと言って、彼女は白魚のような白い指で、ジャケットに「吉川さんへ 青木美香どうぞよろしく」と達筆で書いてくれた。この時、彼女がアナウンサーで南極向けの放送をしているということを知ったのである。小生はなけなしの財布より一円の大札を三枚と少々を取られてしまったのである。あの時、小生は板橋マンションにて生活しており、あの三枚は非常

に懐にひびき、その日の夕食は減量せざるを得なくなり、夜中に腹の虫が騒ぎ出して弱ったものである。あの時、美香ちゃんに弱かった人はまだ二、三人はいたと記憶している。

その後、ふじの出港の日がだんだん迫り、多忙な日が続き、板橋マンション 晴海倉庫の間を往復している間に、そのレコードのことなどすっかり忘れてしまっていたのであるが、その後の家族会、壮行会や出航の日の波止場でも、彼女の派手な美しい姿を見ることは出来たが、レコードのことなど思い出すすべもなかったのである。

長い航海の末、全く順調に南極に着き、酷使の建設作業も終わり、越冬成立も無事出来、それぞれの個室も割り当てられ、荷物整理にかかった時、全く忘れていたこの一枚のレコードが、物品調達リストの間から出て来たのである。別に、美香ちゃんの声を聞こうと思ってこの一枚のレコードを後生大事に南極まで持って来たのではなかったが、何かの拍子に物品調達リストの間に挟んでいたことを忘れてしまつて、はるばる持って来てしまつたのである。

その後、隊員の中から、南極向けにいつも楽しいニュースを送ってくれる青木美香の後援会を作ろう、という意見が出て、何のトラブルもなく後援会は生まれたので

ある。その会長に、美香ちゃんと背の丈、客観、性格？共に全くぴったりの小元会長が誕生したのであるが、彼はまだ一回も美香ちゃんに逢ったことがないのが残念である。

後援会誕生後、早速この一枚のレコードが役に立ったのである。他にも買った人はあつたのであるが、誰も持って来てなかつたので、この一枚が貴重な存在となり、会長初め美香ちゃんのファンも多く、連日このレコードをかけて既に暗誦した人もあり、ミッドウィンター祭の時は『南極の恋人』の大合唱をやり、日本に帰った時、羽田で美香ちゃんと『南極の恋人』の大合唱を夢見て、連日猛訓練に励んでいる人もいる。一日も早く、全員で合唱が出来ようになるようにしたいものである。

このレコードを日本に持って帰る頃には、擦り切れて音も出なくなっているでしょう。青木美香後援会を、帰ってから十次隊の手で育てて行きましょう。

前後援会長以上に、一日も早く彼女との再会の日を首を長くして毎日を元気に暮らしている。

早く日本に帰りたい。

会長就任あいさつ

鈴木裕

振り返って考えてみれば、コトは九月四日の夕食後に起

こつたのであった。デポ隊出発前夜のドサクサにまぎれて、小元ポーリン会長に会長代理を押しつけられてしまい、この度、そのまま会長として居座ることになってしまった。

十次隊の中では、オペ会メンバーから便所係まで実に五十を超える任務分担がある。この青木美香後援会長は、これらの係に比べれば比較にならない程楽しい係である筈であるが、これは小生にとっていささか気が重い就任であった。会長選出会議の時のゴタゴタを、「代理会長ではダメだ！専任会長として大いに後援会を盛り立てよ。その為には、事務局長を置くのではないか。」という事ではないか、と一人好意的に解釈してみても、「役を引き受けるのは税金を払うようなものだ。しゃくはないは。」というぐらいの気持ちしか湧いてこない。所詮、このような後援会長は後援すべき人にノボセ上がったいなくては出来ないことであろうか？

プリンスホテルでの壮行会の時、チラッと見かけたミカさんは、スラリとした和服姿の何となく垢ぬけた素敵なお嬢さんであった。放送を通じて聞こえてくるミカさんの声は、透明度の良いやさしい声である。そしてミカさんの歌は、……。いやいやこれくらいで結構ミカさんにホシるだけのデータは充分です。皆さん、大いにホシてミカさんをバックアップして下さい。

会長就任後のミカさんからの第一報は、「日本短波放送出演の応援を頼む。」であった。これに対して、会員諸兄から「NSBヘテコ入れしてやれ。」とか、「スポンサーにも電報打たなくては。」「スポンサーは小松か日本鋼管だろう。」等々の注告、激励を頂き、有難いと思うと同時に、後援会はこの間にも成長しているのかと、前任のポーリン氏に敬意を表す次第です。

青木美香後援会宛受信電報

十一月二〇日受信

シブセイリツノアトウタヲキキナガラコウシンヲウケトリ、ムネヲアツクシテオリマス、二五ヒニフジガタチマス、モウスグゴエノタヨリデキマス、ガンバツテクダサイ、ホンブシブゼンカイインノミマサマ「ミカ

十二月十二日受信

タイインノミナサマオゲンキデスカ、コチラハシワスオオイソガシノヒビ、ナンキヨクローズトシテ十一ガツ二五ヒ、ニツケイ十二ガツシユウカンブンシユントピツクスユウカンフジニケイサイサレ、十ジタイノミナサマトータイカンヲツヨクシテイマス、ライシユンカラシンバンギミ(チン・プイプイ)モキマリ、ライネンハヨリカツヤクシタイトオモイマス、ヨロシク「ミカ